

の卓越性を測る「宗教的な尺度」であると意図していたこと、そしてトレルチもまた、宗教独自のアプリオリを認めながらも、宗教と倫理の調和が宗教の妥当性を測る基準となると考えていたことである。オットーとトレルチは、他の何かに還元出来ない宗教独自の要素を「宗教の本質」と考え、その解明を宗教哲学の課題としていたことは確かであろうが、それは彼らにとって宗教哲学の最終課題ではなかった。「宗教の本質」の探究は、人間精神の他の本質との連関を考察するためのものであり、その問題意識に規定されていたのである。

アプリオリな宗教性の内部での合理性と非合理性の調和（オットー）、あるいは宗教的アプリオリと倫理的アプリオリの調和（トレルチ）を歴史の中にある実定的宗教を判定する基準と考えることから、二人の関心は共に宗教と歴史の関係へと向けられる。しかしトレルチは、オットーの議論における宗教と歴史の関連についても批判する。オットーはヌミノーゼ感情を人間の素地（Anlage）に位置づけ、その現れと合理的・倫理的思考との調和が宗教史を形成すると考えたが、トレルチの目にそれは歴史的な発展とは無関係であり、同一のものが現れてくる連なりに過ぎないと映った。トレルチにとって歴史の問題とは、実際に何が宗教的かつ倫理的に「善」とされるのか―オットーの言葉で言えば「聖」とされるのか―という具体的な内容を伴った議論であった。歴史に対する両者の理解もまた、合理性／非合理性についての議論と同様、両者の思想的背景から慎重に論ずべき問題である。しかし、「宗教の本質」と歴史との関連についての理解の差とその帰結については多少考えること

が出来る。宗教的・倫理的な理念の実質的な価値を重視するトレルチは、歴史主義の問題へと巻き込まれる。「本質規定は本質形成である」と延べ、「本質」を語るとは固有の歴史状況に対する応答であると考えられるトレルチにとっては、「宗教の本質」の問いはヨーロッパにおけるキリスト教と神学の問題へと限定されるのである。一方、宗教と倫理の形式的な連関を重視するオットーは歴史的背景を越えて「宗教人類同盟」を組織することが出来たのである。

以上より、「宗教の本質」の探究が歴史性と関連しうるという可能性をオットーとトレルチの振幅の範囲で示した。もちろん、歴史性を帯びることが可能だからといって、当時の宗教本質論をそのまま支持出来るということにはならない。しかし、本質論対反本質論という単純な構図はもはや描けないだろう。

神経科学の冒険

—— 思考実験と宗教哲学の可能性 ——

松野 智章

神経科学者であるB・リベットによって衝撃的な実験結果が報告された。その結果とは、一言でいうと「意思に先行して脳が活動している」というものである。実験は一回転が二・六五秒で高速に動く時計盤面を被験者に見てもらいながら任意に一回右肘を動かしてもらう、というものである。その時、脳の電

パネル

気信号である準備電位の観測もする。そして、後に何時、肘を動かそうと思ったのかを確認する。その結果、当初予測した「思う↓準備電位↓肘が動く」の順ではなくて「準備電位↓思う↓肘が動く」という順が明らかになった。肘を動かそうと決断した瞬間「時間 t 」より、平均して 0.2 ないし 0.3 秒前に、脳内の準備電位の活動が見られたというのだ。

このリベットの報告を宗教の問題として捉えて考えてみたい。というのも、精神が肉体をコントロールすると素朴に考えていたからこそ「魂」というものの発想が出来たのではなかったのか。つまり「脳↓精神↓肉体」では靈魂が入る余地がない。もちろん、生命そのものの何かを「魂」と想定するのなら「魂↓脳↓精神↓肉体」という枠組みは用意できる。しかし、この場合でも自由意思をもった靈魂は認められない、という結論が待っている。このパラダイムの転換は宗教にとって重要な問題をもたらすと思われる。というのも、リベットの結論は科学を下敷きとしながら、唯物論が正しいという可能性を生み出したからだ。しかし、唯物論の主張はパラドックスを生じさせるという指摘もある。それは、すべてが脳の電気信号に過ぎないのであれば主張自体もただの電気信号であり何も主張したことにならない、という批判である。つまり、唯物論が成立するためには観念の導入をしなければならず、その時点で矛盾をきたすというのである。これは、自己言及のパラドックスの一種といえる。しかし、思考実験「水槽の中の脳」等をモデルとしながら、唯物論を下敷きに考えれば、これらの問題は第三者が指摘すると問題自体が生じないという特徴を有していることが

分かる。つまり、他者が述べた命題が脳内における電気信号のA状態に起因するであれば、水槽の中の脳がA状態にいる限り正しい事を言っていると判断してよいと言えるのではないだろうか、ということである。ただ、水槽の中の脳の主張は、「雪は白いは〈雪が白い〉ときに限り真である」と真理条件を経て真偽が決まるので、その命題のみから即真が導きだせない。つまり、唯物論も真理条件の枠内においてのみ真となる、という限定を了解するのであれば、パラドックスは回避される。

では、パラドックスを回避した唯物論は宗教を否定するのか。結論は難しいと思われる。まず、真理条件の枠内という制約を受けた唯物論は、神など検証できないものを否定できない。また、すべての言説が脳内の電気信号であるならば、そもそも宗教的言説と唯物論と差があるのかという問題が生じる。なぜなら、電気信号に意味は伴っていないからである。その意味で、徹底的に行動主義的な立場となる。つまり、宗教は信者の脳の状態がC状態やB状態になっているだけで、その事自体が否定されることではないからである。しかし、他の脳内の電気信号と対立する場合は、検証の結果に従い否定されることになる。したがって、自由意思をもった靈魂などは否定されるが宗教自体は否定されない。宗教は、制約を受けることになるが存続が可能だということである。

今後、神経科学は目覚ましい発展を遂げることが予測される。特に、Brain-machine Interfaceのような出力だけではなく、入力が可能となったとき、宗教は心や魂といった問題と改めて向き合わなければならなくなるに違いないのである。